

## 私の研究——公害・環境問題に取り組む

石川 孝之

私の学生時代、ずいぶん昔の話になりますが、公害環境問題に取り組む人は「反権力的」グループと見られていたように思います。最近では、環境をキーワードに検索すると、環境ビジネス、環境経済、環境法学、環境民俗学、環境土木など既存の学問分野の頭に環境が付いた言葉が出てきます。環境の裾野は広がり、その内容も実務レベルから研究レベルまで様々で、一般社会もその重要性を認識するようになったと実感します。

しかしその前途は多難な状況にあります。化学物質汚染を例に挙げれば、その影響は広く浅く進行し、被害が表面化するのには長期化する傾向にあります。問題解決も要因が複雑に絡みあい、解決策が多面的展開を必要とします。

私はこれまで自治体の現場で、公害環境行政に係わる業務に従事してきました。その多くは環境監視、規制指導、環境影響評価に関するものです。単調な日常業務でも現場に出向くと様々な疑問が湧き出てくるもので、個人的な疑問を解決したい動機から大学の先生方などのお付き合いが始まりました。公害問題では既に故人になられた田尻宗昭先生（海上保安庁から東京都に活動の場を移し、最後は神大教授）や宇井純先生にお世話になりました。

1980年代に私が関心を持ったのは環境管理計画についてです。1969年にアメリカで国家環境政策法が制定されましたが、ケネディ大統領政権下で国家顧問を務め、『DESIGN WITH NATURE』の著者であるIan L. McHargが提唱したEcological Planningという手法を知りました。この手法が日本でどのように発展し、行政計画でどのように活用されているのか、その課題はどこにあるのかを調べました。

Ecological Planning（地域生態計画）の真髄は環境情報を地図情報に変換し、プランニングの実務

でその応用性を高めたところにあります。環境情報はレイヤーケーキモデルとして重ねて相対評価し、プランニング資料としますが、ここから環境を評価することにも関心を持ちました。最近では環境を評価した上で、行政計画にどのように活用するのか関心の焦点も変化しています。

現在は「土壌動物を指標に都市土壌の乾燥化を評価する手法の開発」、「明治時代の植生図作成とGIS化による活用方法の研究」などを行っています。これらは横浜国立大学の原田洋先生との共同研究です。実社会の問題解決には専門知識とともに総合的知識も要求されますが、私の関心領域はもっぱら専門化した分野の複合的領域であり、隙間分野といえるものですが、別の見方をすれば行政学や環境政策学にも密接に関連します。

昨年夏、中国の新疆ウイグル自治区を訪問しました。目的は天山山脈に広がる湿地帯バインブルグの調査、タクラマカン盆地のタリム川流域に広がる胡楊林調査です。当初は2009年夏に訪中する予定でしたが、ウイグル暴動が勃発し延期となっていました。今回は新疆大学や新疆師範大学の先生方との交流も実現し、生態移民の研究者ともお会いすることができました。イスラム文化の影響が強く、多数の少数民族が生活する中国西部地域、そこでの開発と環境保全に関する見聞を深めることができました。滞在中は穏やかなイスラム社会を知ることができました。この貴重な体験を今後の研究に活かしたいと思っています。



（横浜市環境科学研究所、法学研究所客員研究員）